

ISBN4-497-20213-5

C3039 ¥4800E

東方書店

定価 (本体 4800 円 + 税)



9784497202130



1923039048005

小長谷有紀 編

北アジアにおける

人と動物のあいだ



北アジアにおける
人と動物のあいだ

小長谷有紀 編

東方書店

東方書店

馬の搾乳儀礼「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」再考

——儀礼の政治性と身体性をめぐって——

上村 明

1. はじめに

「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」とは、「牝馬の子（種）を出す習慣」を意味し、モンゴル国のおもにゴビ地方の牧民のあいだでおこなわれてきた1年の馬の搾乳開始にともなう儀礼を指す。この儀礼については、モンゴル国内のほか、外国人研究者の研究もあり、牧民生活の年サイクルでもっとも豊かな季節の始まりを祝い、雨が降り、草が生え、馬群や家畜、そして人々の繁栄を寿ぐ増殖儀礼と解釈されている⁽¹⁾。

この儀礼は、社会主義時代の70年代以降からは、新しい民族文化の「創造」の文脈のもとに、モンゴル国民—民族全体の儀礼として位置づけられ、1990年以降の民主化時代においても、儀礼をあつかう啓蒙的な出版物や研究書で、地域的な偏差や文脈ぬきに「モンゴル民族」の儀礼として記述されてきた。

しかしながら、ほかの文化的要素、たとえば言語やデール（モンゴルの民族服）などの全国的な標準化が進む一方で、この儀礼に関していえば、現実には馬の搾乳をおこなわない地方や牧民も多く、またゴビ地方でも、出版物に記述されているのとはかならずしも一致しない儀礼や多様性がみられる。

本論は、まずこの儀礼がモンゴル（人民共和）国の出版物の中で国民的な儀礼として再構成されていく過程を、その言説が生みだされた状況に送りかえし、再文脈化することによって明らかにする。そして、現実にはこの儀礼がそういった「国定」の型に一元化されていかず、ローカルな多様性がみら



図1 馬の搾乳 (1992年9月19日, ウムヌゴビ県ハンボグド・ソム)

れるのはなぜか? さらに, そもそも, このような儀礼が生活の中で実践されつづけていく条件とは何か? という問題について, 私自身のおこなった聞き取り調査の資料をもとに明らかにしたい。

2. モンゴル(人民共和)国の文献の記述

モンゴル(人民共和)国では, この儀礼についての文献は1960年代から出版されている。まず, これらの記述を1つ1つ追って, 学問研究の分野において, この儀礼がどうとらえられていたかみていこう。

(1) B. ソドノム「モンゴル民衆の協働の歴史より」(1963年)

モンゴル人民共和国で出版されたこの儀礼についての最初の文献は, 1963年B. ソドノムがモンゴル科学アカデミー言語文学研究所の学術誌『言語文学』に発表した「モンゴル民衆の協働の歴史より」という論文である(Содном, Б.1963)。ここでの記述をまとめると以下ようになる(カッコ内は引用者の注)。

馬の搾乳を始めるのは寅の日, 終わるのは戌の日である。人々が協力して子馬を捕らえ, ゼルとよばれるロープにつなぎ, 最初の乳を搾る。その乳を3日ぐらい発酵させ, 馬乳酒ができてから, また人々が集まり, できた馬乳酒を宙に撒く儀礼をする。馬乳酒の入った桶を馬に乗った2人がもち, それにしたがう1人が9つのくぼみのついた木製の匙で桶の馬乳酒を四方八方に撒き, その3人の前には, 馬に乗ったもう1人が「ゲーニー・ウルス・ガルガハ」をおこなう。つまり, 乳を撒くことは「ツァツアル(乳を宙に撒く儀礼的行為)のことば」(цацлын үг)を唱えながら, ゼルを太陽回り(右回り)に3回回るのである。その後にしたがう3人の1人は, 乳を撒くのと同時に「ツェゲэнд・ツァド」(Цэгээнд цад. 馬乳酒に満腹しろの意)と叫ぶ。それが終わると集まった人々は, ゲルに入り, 食べ物, お茶, 馬乳酒を飲み, 宴を始める。しばらくして, 「牝馬を捕らえ(て搾乳し)た祝詞」を述べる人間になみなみと注いだ馬乳酒とハダグ(儀礼用の絹布)を捧げて, 祝詞を述べさせる。祝詞が終わると, オルティン・ドー(日本の追分に似た無拍の民謡)を歌い本格的な宴が始まる。

これが, いつの時代のどの地方のものかは, この論文の中にも, また他の文献にも一切言及がない。

上の記述のあいだに, 乳を撒くとき唱える「ツァツアルのことば」と祝詞が挿入されている。ソドノムが古い時代のものとして引用するこの「ツァツ

ルのことば」は、「Gegün-ü sün-ü sačuli-yin sudar orosiba」(牝馬の乳を撒く経)を短縮したものであるらしい(Damdinsürüng1959)。

この論文には、儀礼から宗教(仏教)色を取り除き、牧民の労働の祭りとしてとらえなおそうとする意図がみえる。

(2) Ch. ソドノム「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス——民族誌の記録——」(1965年)

そのつぎの文献は、1965年Ch. ソドノムが、科学アカデミー歴史学研究所の学術誌『民族学研究』に発表した「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス——民族誌の記録——」であり(Содном, Ч. 1965), 現在までの文献でもっとも詳しくこの儀礼について記述したものである。

ソドノムは、この儀礼を「土地の主に乳製品を捧げ祭るシャマニズムが根底にある」儀礼と規定し(Содном, Ч. 1965: 30), 1930～40年代までゴビ地方でおこなわれていたとする。また、この儀礼をおこなう家を、6～7頭以上の牝馬あるいは、種馬のいる馬群をもつ家がウルスを出していたと限定する(Содном, Ч. 1965)。

ソドノムは、儀礼を以下の①から③の3つの局面に分け記述している。

①牝馬を捕らえる(Гүү барих)

人々が集まって、ゼルを張り、子馬を捕らえる。小宴をする。

②ウルスを出す(Үрс гаргах)

馬乳酒を蓄えるなど、宴の準備。

子馬を捕らえ(そのときこの儀礼のための羊も屠殺する)、お茶を飲んだ後、馬乳を搾る。初めの1頭は男性が搾る。

お茶を飲む前、ラマがゼルの両端に石でオボーを作る。その上端(高い側)で「ボム・サン」(Бум сан)という経を読む。このときの経は、バルダン・ザサグ旗では「トゥメンデンベレリン・サン」(Түмэндэмбэрэлийн сан)か、「ボム・サン」、トゥシェート・ワン旗では、「ゴドマー・バラ

イチヨド」(Годмаа барайчод)である。これらの経を読むことによって、雨が降るように、草と乳が豊富で、豊かになるように祈る。そして、羊の右の長い肋骨と右脚の部分の部分をゼルの下端で焼く。これを「ウルスを作る」(Үрс хийх)という。

それから乳を撒く儀礼(цацлын ёслол)をおこなう。これは、集まった人々の乗ってきた馬の中から、9頭(9頭が集まらない場合は7頭か5頭)の白あるいは灰色の馬を集めておこなわれる。それに乗り2人が、乳の入った桶をかけた馬捕り棹の両端をもち、もう1人それについて乳を四方八方に撒く。この3人を家の主人が先導する。

馬乳を撒く儀礼のあと、ゼルのところから、羊の肉、酒などが何人もで、ゲルの入り口まで運ばれる。ここで、運んできた客と主人のやりとりのことばが引用されている。

③ウルスの宴(Үрсийн найр)

ゲルの中に入れた羊の肉を参加者に分ける(үрсийн хувь хуваах)。そして、「牝馬のウルス(子・種)を出す祝詞」(Гүүний үрс гаргахын ерөөл)が唱えられる(原文・訳は資料(1)を参照)。

このあと、酒つぎに馬乳酒がふるまわれる。

主人が「宴の世話人」(найрын түшмэл)を指名し、東西二手に分かれて、歌を競う。中休みで、競馬、相撲をすることもある。「杯の祝詞」(сөнгийн ерөөл)で宴が終わる。

論文中に書かれているとおり、この記述は、1961年におこなわれた言語文学研究所のゴビ地方での調査にソドノムが参加し記録した情報をもとに書かれている。読まれる経の名前から、この儀礼が、バルダン・ザサグ旗、つまりボグド・ハーン時代のサインノヨン・ハン部ヨスト・ベイス旗(清代の同部左翼右旗)でおこなわれていたものであることがわかる。

この論文の第一の特徴は、すでに述べたように、ほかの文献にくらべ儀礼の細部にわたる詳しい情報を提供していることである。だが、B. ソドノム「モ

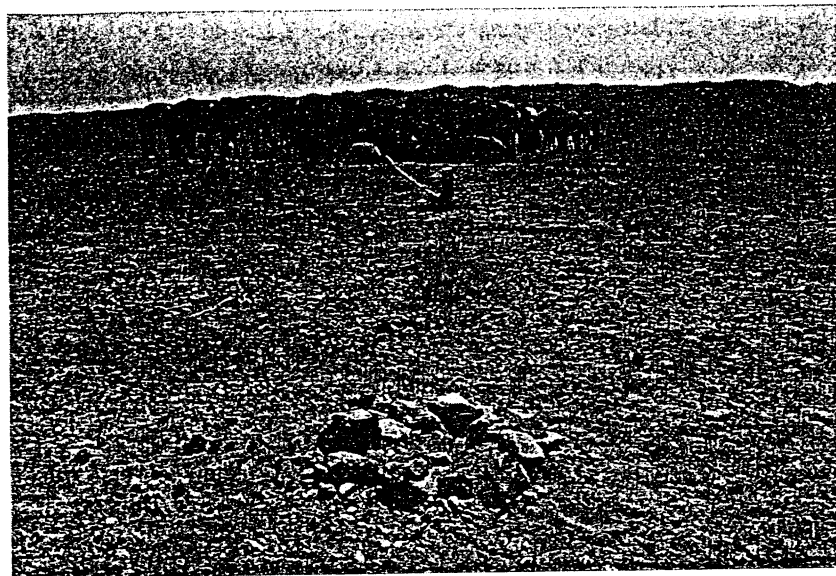


図2 仔馬をつなぐロープと杭。手前に見えるのは肉が焼かれた火のあと。その中間に増殖の象徴であるデルス（дэрс、イネ科ハネガヤ属）が植えられている（1992年9月19日、ウムヌゴビ県ハンボグド・ソム）

ンゴル民衆の協働の歴史より」にあった馬乳酒を撒くときに唱えることばや掛け声の記述（Содном, Б. 1963）がない。撒くのも馬乳酒ではなく馬乳である。その代わりに、儀礼のための羊が屠殺され煮られ、その肋骨と脚の部分が焼かれる「ウルスを作る」儀礼の記述がみられる。ラマが経を読む部分の記述も前出の論文にない特徴である。

(3) ガーダムバ、ツェレンソドノム編『モンゴル民衆の口承文芸の精華』（1967年初版）

3つ目の文献は、初版が1967年に出た、ガーダムバとツェレンソドノム編の『モンゴル民衆の口承文芸の精華』である（Гаадамба & Цэрэнсодном 1967）である。ここでは、Ch. ソドノムの記述で「ウルスの宴」の始めに唱えられる（Содном, Ч. 1965）ものと類似の「牝馬のウルス（子・種）を出す祝詞」と、その解説として儀礼の手順が述べられている。それは以下のと

おりである。

ゴビ地方では、夏の終わりの月に「グーニー・ウルス」をする。

ウルスを出す日、近隣の馬捕り棹の手だれたちが集まり、ハダグを馬捕り棹に結び、それでその年もっとも早く生まれた子馬を捕らえ、ゼルの上端につなぐ。子馬を捕らえ終えたら、アルツ（杜松の葉）の香を焚いてゼルを清め、ウルスをする家に入る。こうして料理を作り、客をもてなし、家の主人は本当のウルスをする日を伝える。ウルスは、おもに水・月曜日の、馬乳酒がよく発酵したところにする。

ウルスの最初には、サン（さまざまな神的存在を称え香を供する経）を読む僧が、ゼルのところで、2本の杭のそばに石でオボーを作り、経を読む。ゼルの上端には、大きなフェルトが敷かれ、特別のテーブルの上に、木の皿に盛り付けられた肉、ふり撒かれる馬乳酒、乳、酒、供儀の食物が並べられる。そのテーブルの前には、乳の入った大きな桶と、柄に五色のハダグを結び、先端に9つの四角いくばみのある匙が置かれる。

家の主人は、客人たちの馬から9頭（9頭に足りなかったら、7頭でも5頭でもよい）の白馬を選び、乳を撒く慣わし（ёс）を始める。ゼルのところで9頭の白（あるいは灰色）馬に乗った人たちは、ゲルの入り口まで行き、銀杯の乳を順番に（先頭は家の主人）飲み、ゲルを太陽回り（右回り）に回り、ふたたびゼルの近くに敷いたフェルトのところにもどる。そして乳の入った桶の取っ手に馬捕り棹をとおして、2頭のおとなしい馬に乗った人間にもたせる。そして2頭の馬のあいだに白い（あるいは灰色）馬に乗った人がつきしたがって、前述の9つのくばみのついた木の匙で、桶の乳を撒き、ゼルを太陽回りに3回回り、「ツェーン・ツォド、ツェーン・ツォド」（Цээн цод、馬乳酒 [цэгээ] に満腹しろという由緒あることば [язгуур үг] らしい）とメロディーをつけて叫ぶ。乳を撒いたのち、種馬のたてがみにハダグを編みこみ、その年最初に生まれた子馬の頭にもハダグをつけ、聖別する。9人の馬に乗った人たちは、ゼルを回った後、

営地 (хот) を太陽回りに回り、馬捕り棒を地面につけずにゲルまで行き、ゲルに立てかけて中に入る。

そのあいだ、ゼルの近くにあった食べ物やお茶を何人もで運んでくる。そのとき、3回それをおろして「昼休み」を入れる。休むとき、「止まろう」と言い、出発するときには「移動しよう」とみんなで言う。

ゲルの入り口まで来て、「ウルスの食物を届けに来ました」と、ゲルに向かって伝える。そうすると、主人が出て来て、「道中ご無事で？ どこで昼休みし、どこに泊まって来ましたか？」と言うと、ウルスの食物を運んできた人たちの1人が、近隣にある豊かな意味のある土地の名前を挙げて、「どこそこに泊まりどこそこで昼休みして参りました」と答える。そうして、食物を主人に渡し、「これは何か？」とたずねると、「これは……（この部分の原文・訳を資料（2）に挙げた）」と答えて、主人はウルスの肉をもち、それを分ける2人の人間を指名する。そして、ラマと主人の2人が腰肉を味わたあと、指名された2人が肉を細かくして宴の客すべてに食べさせる。こうしたのち、主人は酒を入れた銀杯をハダグといっしょにもち、立ち上がって祝詞を語る人間に向かい、「兆あるすばらしきことばを言ってください」と酒を渡すと、祝詞を語る人間はハダグを両手に広げて、最初の祝詞を唱える。そのあと、主人は給仕を手伝って杯を渡す2人の子供と、右手と左手両側に1人ずつ宴の世話役を任命し、宴会を続ける。

上の儀礼の手順をみると、大まかにはCh. ソドノムの記述（Содном, Ч. 1965）と一致するが、これにない馬乳を撒くときの掛け声についての記述を含む。しかし、儀礼のための羊肉の部分焼かれる記述を欠いている。Ch. ソドノム「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス——民族誌の記録——」（Содном, Ч. 1965）とこの文献の記述は、その後に出された文献の基礎資料となっている。

Ch. ソドノムの資料（Содном, Ч. 1965）は、ソドノム自身が調査報告書

提出の段階で提出しなかったらしいのに対して、この文献のもととなった資料は、まだ言語文学研究所に残っている。この資料は、「ウルスをする」（Үрс хийх）という名前で、資料番号「x10 т 2 хн1」に保管されており、インフォーマントは、Sh. アルツ（48歳、ハルハ男性）という、ウムヌゴビ県バヤンダライ・ソム、ゴルバン・サイハン・ネグデルの第4ブリガード（組合作業班）の羊飼いであった。キリル文字が読み、むかし盗賊（сайн хулгайч）として各地を放浪したとある。この情報は、旧トゥシェート・ワン旗、今のドンドゴビ県デルゲルハンガイ・ソム、ウムヌゴビ県マングル＝オボー・ソムでおこなわれていたのを、彼が語ったとされている。トゥシェート・ワン旗とは、ボグド・ハーン時代のトゥシェート・ハン部トゥシェート・チンワン旗（清代の同部左翼後旗）である。

この2つの文献（Содном, Ч. 1965, Гаадамба & Цэрэнсодном 1967）は、調査がいつ、どこでおこなわれたかについて一応言及し、その限りでは、地方差や調査の文脈にセンシティブといえる。

（4）Н. ニヤムボー『今日のモンゴルの習慣』（1976年）

Н. ニヤムボーの『今日のモンゴルの習慣』の「牝馬を捕らえる習慣」（Гүү барих ёс）の項目（Нямбуу 1976: 72-74）は、ガーダムバとツェレンソドノムの記述（Гаадамба & Цэрэнсодном 1967）をもとにしているが、ゼルのかたわらに作るオボーやラマの関与など仏教に関係する部分が削られている。またそれに続いて同じ文献から引用されている「牝馬のウルスを出す祝詞」は、短縮されており、ウルスの羊肉がゲルに運び込まれるときの、主人と客たちのやりとりも省略されている。また、この儀礼をおこなう日も、はじめて子馬を捕らえた日と馬乳酒ができてからの2とおりと述べている。あとで述べるように、この文献は、牧民に対して新しい時代の新しい儀礼の手本を示すという目的で書かれている。

(5) サンピルデンデブ『牧民民衆の儀礼の伝統』(1985年), 同編『牧民民衆の儀礼の口承文芸』(1987年)

サンピルデンデブの『牧民民衆の儀礼の伝統』(Сампилдэндэв 1985: 55-61)では, Ch. ソドノムの記述(Содном, Ч. 1965)をもとに, それにB. ソドノム論文(Содном, Б. 1963)の乳を撒くとき唱える「ツァツアルのことば」を「ツァツアルの韻文」(цацлын шүлэг)として収録し, また, Ch. ソドノムの記述(Содном, Ч. 1965)にはない乳を撒くときの掛け声「ツェゲэнд・ツァム」がガーダムバとツェレンソドノムの記述(Гаадамба & Цэрэнсодном 1967)から引用されている。しかし, 羊肉をゼルのかたわらで焼く儀礼は削られている。

彼は, この儀礼を, 羊や牛の乳を撒くツァツアルの儀礼と比較し, 天や周辺の山川に乳を捧げるという意味でこれらと同じ形式をもつ儀礼であるが, 前の2つが春を迎え子畜の誕生を祝う祝いなのに対して, この儀礼は夏を迎え馬乳酒を作ったことを祝う労働の祝いだとしている(Сампилдэндэв 1985: 55)。そして, 「現代においては, 『グーニー・ウルス・ガルガハ』の習慣から, ツァツアルを捧げるなど信仰に関係する部分は捨て去られ, 社会主義的生活習慣の要請に適合した労働の祝日の意味が加わったのである」と述べる(Сампилдэндэв 1985: 61)。このように, サンピルデンデブは, Ch. ソドノムの記述(Содном, Ч. 1965)をもとに, それに他の出版物からの要素を総合し, 儀礼の「全体像」を復元するとともに, 現代みられる儀礼の変化にも眼を向けている。

サンピルデンデブが1987年に編纂した『牧民民衆の儀礼の口承文芸』では, この儀礼に関係するつぎの5編の「口承文芸作品」が出版物から引用され収録されている(//内は引用文献・資料を示す)。

①Гүүний үрс сүүний цацлын үг. / Б. Содном 1963/

②Гүүний үрс гаргахын ерөөл. А Хувилбар. / Гаадамба,

Цэрэнсодном 1967// х 10 т 2 хн 1, 1961/

③Гүүний үрс гаргахын ерөөл. Б Хувилбар. / Гэлэгбалсан 1961. Ерөөлүүд. УБ. pp.24-25/

④Гүүний барихын ерөөл. А Хувилбар. / Цагаан, Д. 1961. Монголын утга зохиолын унших бичиг. УБ. pp.9-12/

⑤Гүүний барихын ерөөл. Б Хувилбар. / Б. Содном 1963/

①は馬乳(酒)を撒く「ツァツアル」のときに唱えることば, ②と③がウルスの宴の祝詞, ④と⑤が儀礼のために羊肉が供されない場合の祝詞である。この②③と④⑤の違いは, 『牧民民衆の儀礼の伝統』にも説明がないが(Сампилдэндэв 1985), あとで述べるように牧民の中には区別するものもいる。サンピルデンデブもこの2つを区別しているのは明らかである。

(6) バダムハタン編『ハルハの民族学』(1987年)

バダムハタン編の『ハルハの民族学』におけるこの儀礼についての記述(Бадамхатан 1987:360-362)は, とくに言及されていないが, ガーダムバとツェレンソドノムの記述(Гаадамба & Цэрэнсодном 1967)と基本的に一致している。ただ, この儀礼をハルハの南部・中部・東南部に限定しており, また南部と限って最初の搾乳のさいに桶の中に植物のアイリスを「トーハイ」という結び目を作って入れるという地方の特徴も紹介している。

この文献は, 「モンゴル(人民共和)国の民族学」シリーズ全3巻の第1巻である。モンゴルの民族学調査は, ヤスタン(ястан, 下位民族集団, ethnic group)ごとに, 19世紀末から20世紀初め, つまり革命以前の牧民文化を再構成することを目標としており, この3巻はその集大成といえる。いわば, 「民族(俗)学的時空間」の中で記述がなされていることに注意する必要がある。

(7) アリヤースレン, ニヤムボー共著『モンゴルの慣習中辞典』(1991年), 同『モンゴルの慣習大辞典』(1992年)

90年代以降出版されたアリヤースレンとニヤムボーの共著『モンゴルの慣習中辞典』と『モンゴルの慣習大辞典』第1巻には、「牝馬を捕らえる習慣」(Гүү барих ёс)という項で、この儀礼がとりあげられている(Арьяасүрэн & Нямбуу 1991: 66-69, Арьяасүрэн & Нямбуу 1992: 575-578)。ここでの記述は、ニヤムボーをもとにした記述(Нямбуу 1976)であるが、「牝馬のウルスを出す祝詞」は削られており、В.ソドノムの記述(Содном, Б. 1963: 22-24)にある「乳を撒く韻文」(Цацлын шүлэг)も、テンゲル(天神)の名の羅列された部分がはぶかれ、前半のみが引用されている。また、最初に乳を搾ったその日のうちに祝う場合と馬乳酒ができてから祝う場合が区別され、前者の場合「ゼルのところで経を読み、香を焚いて、食べ物と並べるだけで、ツァツァルをおこなう」としている。90年代以降の出版物なので、このようにラマや経の記述が復活していることも注意を引く。しかし、もっとも重要なのは、『モンゴル慣習大辞典』の前言で、この本の編集者であるチンゲルが、「モンゴルの習慣は、モンゴル人みなが習得し、それにしたがって生活するべき価値ある財産である」(Арьяасүрэн & Нямбуу 1992: 6)としていることである。この文献は、伝統文化の啓蒙書という位置づけができる。

3. 出版物における記述の一様性

以上、モンゴル国で出版されたこの儀礼に関する文献から、調査で収集された情報が脱文脈化され、モンゴル国民全体の儀礼として再文脈化される過程がみえてくる。

これらの文献をみると、まずВ.ソドノム(Содном, Б. 1963)をのぞくどの文献も、科学アカデミー言語文学研究所による1961年の調査資料⁽²⁾に直接的間接的にもとづいていることがわかる。とくにその資料を直接利用した

ガーダムバとツェレンソドノム(Гаадамба & Цэрэнсодном 1978)を引用した文献が多い。1961年以降も同研究所の調査は毎年おこなわれており、ゴビ地方だけでもほぼ10年おきに調査隊が送られている。また歴史学研究所による民族学的調査もおこなわれた。それにもかかわらず、新しい調査での情報は1970年代以降の文献に盛り込まれていない。というより、新しい調査は1961年の調査の情報になにも付け加えなかった。現実には1961年の調査以上の情報量の情報が得られなかったという理由もあるだろう⁽³⁾。さらに、社会主義時代、一度検閲を経て出版された文献は、権威的な位置づけを与えられ、後続の文献は、新しい情報の掘り起こしや情報の更新が容易にできず、単に引用を繰り返す傾向があったことも指摘することができる。

その中で、Ch.ソドノムにおける羊肉を焼く記述(Содном, Ч. 1965)が、ほかの文献では一度も言及されていないことは、注目にあたいする。この儀礼についての情報を総合しようとしたと考えられるサンピルデンデブの『牧民民衆の儀礼の伝統』でも、この部分ははぶかれている(Сампилдэндэв 1985)。オルドスでは、牝馬の4本の長い肋骨(дөрвөн өндөр)をチンギスに供し、ほかの部分と共食するという(Mostaert 1956: 291)。霊的存在に食物を供するには、ツァツァルのように空中に散布するか、焼いて煙にする方法がとられる。一種の祖先祭祀として、この部分は焼かれてチンギスに供せられたと考えられるから、羊肉を焼く儀礼もチンギス祭祀⁽⁴⁾に関係のある儀礼として、とりあげられなかった可能性がある⁽⁵⁾。また、全体として「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」が、内モンゴルのオルドスやアラシヤンの儀礼と類似していることについても、国外の研究者によって示唆されているにもかかわらず⁽⁶⁾、モンゴル国のどの文献にもまったく触れられていない。

これらの文献は、モンゴル国内に情報源を限定するだけでなく、ほとんど同一の情報を引用する閉じた言説空間を形成しているといえる。もちろん、ニヤムボー(Нямбуу 1976)やアリヤースレンとニヤムボー(Арьяасүрэн & Нямбуу 1991, 1992)と、その他の文献との性格の違いはある。ニヤムボーは新しい社会主義の社会に適合した儀礼の型を示し(Нямбуу 1976)、アリヤースレン

とニャムボーはそれを一種の教養として提供する (Арьяасүрэн & Нямбуу 1991, 1992) のに対して, Ch. ソドノムやサンビルデンデブなどの文献 (Содном, Ч. 1965, Сампилдэндэв 1985) は学術的記述のかたちをとっている。しかし, その境界はそれほどはっきりしたものではなかった。80年代まで学術誌は, 一般の書店でも, たとえばソム・センターの本屋でも, 小説や牧畜関係の書籍などといっしょに並べられて売られていた。学術論文でも一般への教育的配慮が欠かせなかったのである。むしろ, 民衆に奉仕する, つまり民衆を啓蒙・教育し, 国民として作りなおすための鋳型を作ることこそが, 学者に与えられた使命だったといえる。学術的な記述は, そのための素材を提供したのである。

ニャムボー『今日のモンゴルの習慣』は, まさにそのような文脈で登場した文献であった。民族的形式つまり具体的にはそれまでの文献の情報から, 仏教・シャマニズム的と思われる部分をとりぞき, 「新しい生活のための闘争に奉仕」する (Нямбуу 1976: 20) 社会主義的内容を盛り込んだ国民の儀礼のモデルを提示したのだ。ニャムボーは, 「社会主義的な社会関係の発達と生活からの要請によって, わが国の人々のイデオロギー, 美意識, 倫理面で高まりつつある需要を満たす重要な手段としての近代の習慣を, より洗練されたものにしなければならなかった」とし (Нямбуу 1976: 18), 1974年のモンゴル人民革命党中央委員会の「新しい社会主義の習慣様式を作り, それを生活に浸透させていくこと」が重要とする決定 (Нямбуу 1976: 19) や1976年の第17回党大会での「社会主義的生活習慣を発達させ, 深く浸透させることが非常に重要」としたツェデンバル演説 (Нямбуу 1976: 21) など, 一連の党の方針を受け, 「モンゴル民族の伝統的習慣の進歩的遺産をよく理解し, 今日のわれわれの生活に浸透させ将来も発展進歩していく習慣の手本を作り, すべての習慣をおこなう手順を洗練させ, それを生活の実践に創造的に用いていくべきである」とこの本の意義を述べている (Нямбуу 1976: 22)。これは, 儀礼における「モンゴル国民—民族文化」の創出といえよう⁽⁷⁾。ニャムボーののちの著書 (Нямбуу 1984) では, それが理論的に展

開されているのに対して, この本では儀礼の実践上の手本が示されているのである。ここには, 国外のモンゴル人の同様の儀礼についても, モンゴル国内の地方差についても言及はない。

80年代のサンビルデンデブ『牧民民衆の儀礼の伝統』では, このようにいわば政策的に作りだされた民族—国民の枠組みを所与のものとして, この儀礼を『元朝秘史』の記述と結びつけ, それが古くからの伝統であることを示唆する。ここでは, モンゴル国外のモンゴル人であるカルムイク人の「ウルス月の儀式」についても触れられるが, それはさらにウランバートル南にある岩絵と結びつけられ, 「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」が, 古く, 固有のものであることを示す根拠となる (Сампилдэндэв 1985: 55)。そして, 最後に, ツァツアルなど信仰の要素が淘汰され社会主義的な労働の祝いとなったとして, 現代へと連結されている (Сампилдэндэв 1985: 61)。こうして, 儀礼は, 本質的にずっと変わらず, すでにそこにあり, 個人がそれに属するような超歴史的な存在となる。つまりモンゴル民族—国民という主体の一部となるのである。90年以降の民主化の時代においても, このような過程は, かえって強化された。対象化され, そして本質化された儀礼は, アリヤースレンとニャムボーの『モンゴルの慣習中辞典』『モンゴルの慣習大辞典』 (Арьяасүрэн & Нямбуу 1991, 1992) によって, 国民に向かって, ふたたび教養として送りがえされる。

こうしていったん国民文化の枠組みで儀礼がとらえられると, 地方差や文献ごとの記述の違いは, いわばノイズとしてあらわれるようになる。たしかに, バダムハタン編の『ハルハの民族学』は地方差について触れているし (Бадамхатан 1987), また, ガーダムバ, ツェレンソドノム編の『モンゴル民衆の口承文芸の精華』やCh. ソドノム「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス——民族誌の記録——」でも, 調査記録された年や地方の情報が書かれている (Гаадамба & Цэрэнсодном 1978, Содном, Ч. 1965)。しかし, それは, 国民の儀礼の素材として, あるいはモンゴルという土地に固有のものであることのアリバイとしてである。このような地域・エスニックな差異は, 国民

文化としての儀礼の「全体像」からは、ある種の「欠如」あるいは「過剰」とみられるのである。

今でもモンゴル国の少なからぬ研究者にとって、モンゴル国外に居住するモンゴル人との文化的同一性の主張と、モンゴル国内での多様性への言及は、モンゴル民族—国民という主体の存立を揺るがしかねない発言とみなされているように、私には思われる。これは、モンゴル国の知識人にとって、倫理とすらなっている。モンゴル国において知識人になるとは、まさにこのようなナショナリズムのエートスをもつことなのである。

4. ゴビ地方における儀礼の地域差

これまでみてきたように、文献での記述が一様であるのに対して、実際におこなわれている儀礼は、ゴビ地方だけに限っても、文献の記述にはない地域差がみられる。それを、私が1992年から9月10日から24日まで、モンゴル国ドンドゴビ、ウムヌゴビ両県でおこなった聞き取り調査によって示してみたい(資料(3)のインタビューAからKを参照)⁽⁸⁾。

調査した地域全体に共通してみられた点は、第一に、この儀礼が1930、40年代までおこなわれていたとCh. ソドノムが書いている(Содном, Ч. 1965)のとは異なり、社会主義時代にもおこなわれつづけていたことである。インタビューBでは、30年代までこの儀礼がどうおこなわれていたか話してもらったが、ほかのインタビューではその年実際にどうおこなったか、あるいは去年おとしはどうだったかを話してもらったものである。インタビューAにはゼルを張る杭の近くにデルスを植えること、HからKには「タバグ・サイル」についてなど、Ch. ソドノム「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス——民族誌の記録——」(Содном, Ч. 1965)にもその他の文献にも書かれていない情報があり、文献を読んで得た知識を語ったという可能性は考えられない。この儀礼が、ラマの関与がなくなったり、またソムの役人から干

渉されることはあったにせよ、社会主義時代をつうじておこなわれてきたことは、确实といえる。

また、儀礼の目的を聞いたとき、地域を問わず、はっきりとした答えがかえってきた。「雨が降り、草が生え、馬の数が殖えるようにと、ハンガイ(地の主)に馬乳の最上の物と(馬群に対しても)羊肉を分け与える」(A)、「夏、雨が降るように、馬の数が殖えるように」(B)、「大地の主(лус газар)を喜ばせ、雨を降らせ、家畜が増えることを祈る」(G)、「乳がよく出て、馬群が増えるようにと、ハンガイとハン・ホルマスタ神、つまり『母なる大地、父なる天』に対して、また国家や仏教に対して祈る」(J)という答えである。これらは、この儀礼の目的が家畜(とくに馬群)の増殖を祈ることにあることを明確に述べている。

つぎに、個々の事例をみると、A、B、CはCh. ソドノムの記述(Содном, Ч. 1965)とほぼ重なるが、羊肉の特定の部分を焼くことをүрс хийх(ウルスを「する」⁽⁹⁾)ではなく、үрс хайлах(ウルスを融かす)といい、ゼルの下端ではなく、上端で焼くことが異なる。また、Bでは、以前おこなわれていたこととして、アリヤー・エレンマンダという仏を、焼く羊肉の上にのせることが、付け加えられている。この仏の名前は、オルドスなどから書き取られた祝詞や火を祭る祝詞にも登場し、それを文献学的に研究した欧米の論文では、Rimada ~ Rimanda⁽¹⁰⁾と読まれている(Heissig 1968 b : 268, 276, 285, Serruys 1974 : 68, 90)。また、この儀礼の起源説話としてチンギス・ハーンが登場するのもBの特徴である。DとEは、断片的な情報だが、どちらも羊肉で宴をひらいて祝うことがわかる。FとGは、同じブリガードからの情報であり、ツァツアル、羊肉での祝いなど、基本的な構成はAからCと同じだが、Fは羊肉を焼かないとし、Gでは焼くとしている。Fの話者が25歳であるのに対して、Gが71歳であることを考えると、肉を焼く行為は近年つねにおこなわれていたわけではなかったと推測できる。

H、I、J、Kは、うえのような、乳製品と羊肉での祝いと、乳のツァツアルと羊肉を焼く儀礼が無条件に結びついた事例とは、基本的な構成で異なっ

第3部 動物をかたる

ている。ツァツアルはするが、羊1頭の肉を煮て祝うのは3歳馬が子馬（トボク・サイル）を産んだ家だけで、ほかの家ではツァツアルと乳製品だけで祝うからである。これは、Jのインフォーマントによれば「トボク・サイルが生まれるのは非常に珍しいことなので、乳製品に加えシュース（羊肉）を出し、それをみんなに分けて祝うのである」と説明されている。また、調査の地域で一番北のKでは、H、I、Jのようにそれ以降毎年羊肉を出して祝うことをせず、トボク・サイルの生まれた年に限り羊肉で祝う。このHからKまでの4つの事例は、旧行政単位で、トゥシェート・ハン部ダイチン・ベイス旗（左翼右末旗）に属している。つまり、トボク・サイルの生まれた家だけが羊肉で祝うという習慣の分布は、この旗の範囲と重なっているのである。

ここから考えられることは、清代に組織された旧行政組織である旗（ホショー）単位の特徴が形成されていた可能性である。Ch. ソドノム「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス——民族誌の記録——」にも、サインノヨン・ハン部ヨスト・ベイス旗とトゥシェート・ハン部トゥシェート・ワン旗とで読まれる経が異なることが指摘されている（Содном, Ч. 1965）。このように、モンゴル国の調査も旧行政単位について、無関心であったわけではなく、ツェレンソドノムの民族学・口承文芸調査の手引書は、情報提供者の現在所属する行政組織と並んで、革命以前どの旗に属していたかも調査すべき項目として挙げている（Цэрэнсодном 1972）。実際、かなりの調査資料にその記載があるが、前にみたとおり、論文の段階では、そのような情報はふい落とされてきた。しかし、儀礼に関しても、旗という旧行政単位の影響があることに注目する必要がある。

もう1つ指摘しておかなければならないのは、とくにサインノヨン・ハン部ヨスト・ベイス旗とトゥシェート・ハン部トゥシェート・ワン旗が内モンゴルのオルドスやアラシャンと地理的に近いことである。このことは、内モンゴルのこれら地方でおこなわれていたジョラグ（julav）やウルスイン・ナイル（üres-ün nayir）などの儀礼、また「チンギス・ハーン祭祀」とのなんらかの関連を示唆するものであろう。

5. 儀礼の基本要素「モジュール」

これらの事例を、他の儀礼とも比較し、整理すると、共通する3つの要素（以下「モジュール」とよぶ）がみえてくる。この儀礼は、その組み合わせから成り立っているといえる（下表参照）。「モジュール」ということばで示したのは、ほかの儀礼や場面にも組み込みや組み合わせが可能という、儀礼の構成要素のもつ性質である。

モジュールaは、ゼルを張り、子馬をつないだあとに、お茶あるいは簡単な食事で参加者をもてなすというものである。モジュールbは、ゼルを張り、子馬をつないだあとに、母馬の乳を搾り、その乳を空中に撒くというものである。これには、参加者への乳製品や馬乳酒あるいは小宴といったもてなしがともなう。モジュールcでは、羊をこの儀礼のために1頭煮て参加者に分配し、宴をおこなう。これには、羊肉の特定部分を焼いて供物とする供儀がともなう。このように、これらのモジュールは、天神や土地の「主」、祖先といった霊的存在に対する初物の分配・共食である「供物」と、人間に対する分配・共食であるところの「参加者への分配」（もてなし）という、対になる2つの部分からなっている。

	供物	参加者への分配
a	なし（乳茶を宙に撒く）	乳茶・簡単な食事
b	搾った馬乳（初物） あるいは馬乳酒を撒く	乳製品（馬乳酒）
c	ヒツジ肉を焼く	ヒツジ肉の分配・宴

モジュールのミニマムな構成は、aだけで成立し、インタビューAの最後のほうで言及されているように、今後の仕事の成果を折り解散するという場合である。この場合、乳茶が宙に撒かれることもあるが、儀礼というよりも、集まった人々の労をねぎらう意味が強いといえる。地域は異なるが、私が1996年7月にモンゴル国バヤンウルギー県ボルガン・ソムで立ち会った

のも、このように、乳茶が宙に撒かれ、乳茶、乳製品や揚げ菓子が作業を手伝った人たちにふるまわれる簡単な祝いだった。

モジュールbは、この儀礼の核心部分で、これ単独でもおこなわれる。旧トウシェート・ハン部ダイチン・ベイス旗領のソムでおもにおこなわれているのが、これである。また、aをおこなった3日ほどあと、馬乳酒ができてからおこなう場合(a+b)もある。

モジュールcは単独では成立せず、かならずbと結びついて「b+c」か「a+b+c」という連続で出現する。前者は牝馬を捕らえたその日のうちにbとcをおこなう場合、後者はaをおこなった3日ほどあと、馬乳酒ができてからおこなう場合である。旧トウシェート・ハン部ダイチン・ベイス旗では、cはトボク・サイルが生まれた家族だけがおこなうのに対して、サインノヨン・ハン部ヨスト・ベイス旗とトウシェート・ハン部トウシェート・ワン旗では、搾乳開始の儀礼をおこなう家族は、bとcをおこなう。つまり、bとcのつながりは、前者では条件的であるのに対して、後者では無条件である⁽¹¹⁾。

ここで、bとcを2項対立としてとらえ、地方差を1つの構造に吸収することもできるだろう。たとえば、初物である馬乳や馬乳酒の儀礼であるbに対して、cを馬肉の初物を捧げて分配することが起源であったとして、儀礼を再構成を試みることもできるだろう⁽¹²⁾。しかし、ここでは、そういった「深い読み」や儀礼全体の要素間の構造的関係よりも、それぞれのモジュールの実践されてきた条件を考えてみたい。

6. 儀礼の身体性と政治性

この儀礼のモジュールの「供物」部分は、つぎのような毎日おこなわれる生活儀礼と連動している。家の女主人が、大なべに作った乳茶をひとすくいし、ストーブの火に捧げ、それからゲルの外に出て残りを宙に撒く。また、家畜の乳を搾ったあと、桶の乳をひとすくいずつ四方八方に撒く。旅の途中

のオボーのかたわらでも、男たちが酒を空中に撒いて道中の安全を祈る。aとbの「供物」部分は、これらの行為(ツァツァル)のバリエーションの1つであり、もっとミニマムなかたちでは、酒をふるまわれたとき、杯の中に薬指の先を浸し、それを空中にはじく行為(セルチムレフ, сэрчимлэх)とも連動している。これをおこなう人の視線は、やはり宙に向けられている。

また、なべで煮て皿に盛り付けた肉から、それに最初に手をつける家の主人や目上の客が、脂身など数片を切り取って、ストーブの火にくべる習慣は、cと連動している。

もちろん、日常のツァツァルでは女性がおこなうのに対して、この儀礼では男性がおこなうのが通常であること、cでは肉は戸外に張られた子馬をつなぐロープ「ゼル」のそばで焼かれるのに対して、日常の肉を焼く習慣はゲル内のストーブで焼かれる⁽¹³⁾という違いはある。しかし、これら日常の習慣は、この儀礼を解釈する枠組みを提供し、反復されるその動作は、この儀礼の実践における身体技法にいかされている。

「供物」や参加者へのもてなしは、その家族に偏在する富や幸福の一部の再分配だといえる。一般に、馬を搾乳し、馬乳酒を作ることのできるのは、裕福な家庭と考えられる。一定以上の馬乳の量を確保できる頭数の牝馬を保有し、労働力を家族内やその外から調達できなければ、馬乳酒作りはむずかしいからだ。儀礼における分配の目的は、それをおこなう人間の説明によると、「害から家を守る」(G) ためである。つまり、富や幸福の独占は悪であり、なんらかの災いを誘引するかもしれないという意識が存在するのである。それを避けるために、富の一部である馬乳などの「上物」(дээж, 「サンプル」の意味もある)を捧げ、人間に対しては宴でもてなす。

B. ソドノムによれば、乳茶または馬乳酒のような液体を宙に撒いたり、固形物である肉を焼くのは、供物の対象となる天神や山水の「主」や祖先の霊などが「不可視の空気のような存在」(хий сүг)であり、「匂いで満腹する」からだとして説明される(Содном, Б. 1963: 25)。これらの存在は、儀礼で唱えられる経や祝詞ではそれぞれ名前がつけられているが、日常儀礼をおこなう

人間にとっては、個別の存在として意識されず、まさに「空気のような存在」である。むしろ説明するという行為そのものが、捧げる対象を明確にしてみようのだといえよう。「ツァツアル」や肉を焼いて捧げる対象は、富の分配にあずかる、ゼロ記号化された他者としての、まさに「空なる存在」といえる。

財の分配は、それをうながすなんらかの社会的要請にもとづいておこなわれる。ハンフリーとスニースは、「義務の社会関係」という概念を用いて、モンゴル社会における財やサービスの移動のネットワークを記述している。その関係は、互酬的な交換関係ではなく、社会における相対的な位置によって、財やサービスの流れが期待される関係である。たとえば、「目上」(年長)の親族は、助言やなんらかの影響力の行使、物質的・金銭的援助が期待されるのに対し、「目下」(年下)の親族には、尊敬や服従、労働力の提供が期待される。その強度は、彼らが「儀礼家族」とよぶ旧正月(цагаан сар)など儀礼のさいに集まる近い血縁者のあいだでもっとも強く、その他の親戚、友人、知人の順に弱くなる(Humphrey & Sneath 1999: 141)。

現実には、上述のような「義務の社会関係」は、実際の期待された行動、あるいは期待に反する行動によってつねに再構成され、期待される度合いも内容も絶えず変化していくはずである。儀礼における贈り物は、この期待をいわば初期値にもどす役割をはたしているといえるだろう。それによりお互いの社会的位置を再確認するのである。日常ひんばんにやりとりされる儀礼的ともいえる贈り物のやりとりも、これと同じ役目をはたすものといえる。また、旧正月の挨拶(зогдох)の動作は、ふだんは目にみえない関係を「可視化」する。このようにいくつかの儀礼は、義務の社会関係をその前提としている。これら儀礼は、財やサービスの再配置という日常のミクロな政治性と結びついているのである。

ただし、馬の搾乳儀礼における動員や財の再分配は、上述のような基本的な一対一の関係には容易に還元できない一対多の関係にある。これを問題にすると、親族関係に中心を置いた分析よりも、政治的な支配関係などマクロな政治性を視野に入れる必要が出て来る。

儀礼の旧行政単位である旗による特色は、まさにマクロな政治性によって作り出されたものであるといえる。領主など旗の有力者のパフォーマンスによって印象づけられた型が、現在も地域の差となつてあらわれていると考えられるのである。20世紀初めの画家B. シャラブ作とされる「馬乳酒祭り」とよばれる絵画には、この儀礼のようすが描かれている。そこにみられるように、当時、この儀礼は、旗の領主の政治的権力を後ろ盾とするチベット仏教のラマ僧たちが、指導・実行していた。そのさい、宗教的教義にしたがって、モジュールを变形し、組み合わせる作業がおこなわれたであろう。いちど強力に身体に刻み込まれたパターンは持続する。現在にみられる儀礼の地方差は、過去の政治力による身体への刻印のあらわれといえる。



図3 乳を撒くツァツアルは、モンゴルで広く行われている日常的な儀礼である。朝、ヤクの搾乳後、しばった乳の一部を宙に撒いている(1993年9月3日、ホブド県ドート・ソム)

7. おわりに

文献上の記述の分析でみたように、馬の1年の搾乳開始にともなうこの儀礼は、モンゴル（人民共和）国の出版物において、国境の外との同一性と国境の内での多様性をともに捨象することによって、モンゴル国民一民族の儀礼として作られイメージされてきた。これにより、この儀礼の記述は画一化され、ふたたび人々に「教養」として送りかえされるべきものとされた。それに対して、現実におこなわれてきた儀礼には、文献の記述にない細部と地域による多様性がみられた。

この儀礼が、文献的知識の影響を受けずに実践されてきた条件には、目的意識が明確であることや、日常おこなわれている儀礼的所作、つまりツァツァルの習慣や肉をストーブの火に捧げる習慣との身体技法的な連続性が考えられた。また、Ch. ソドノムが書いている（Содном, Ч. 1965）のとは違って、この儀礼自体が毎年継続しておこなわれてきたことも挙げられるだろう。反復され継続する身体的記憶は、出版物の情報より強いと考えられるからである。それに、ゴビ地方の牧民にとって、自分自身のエスニシティはモンゴル国のマジョリティ集団であるハルハなのだから、みずからのおこなっている儀礼が文献の記述と異なっていたからといって、自分の民族性や文化の正統性に疑問を抱く必要はない。つまり、儀礼をおこなう主体は、即自的で充足した存在であって、対象化される契機はなかったのである。

いっぽう、国家のほうでは、社会主義的生活に合わせてイメージされた新しい儀礼の型を伝えるメディアがなかった。儀礼をマスメディアで伝えることは、テレビであってもむずかしかっただろう。そのためには新しい儀礼のかたちを実際に実行して例示する以外に有効な方法はないと思われる。それにはかなりの経済力や政治力が必要だ。社会主義時代、いくら信仰の要素を排除したとしても、ともするとチンギス崇拝にも結びつくかもしれないこのような儀礼を、国家や地方組織が中心となって大規模に実行することは、ま

ず考えられなかった。新しい政治性は、この儀礼において、身体性を獲得できなかったのである。

同時に、儀礼のモジュールは、身体性にもとづいた基本構造を保持したまま、政治的状况に応じてそのかたちを変える「可塑性」ももっている。私が調査したモンゴル国西部のアルタイ・オリアンハイでは、旧正月の元旦の朝、ゲルの近くに積んだ石積み「バリン」の上で、羊の胸骨の部分の肉を焼く習慣がある。しかし、社会主義時代、これは、「非社会主義的」とされ、ソムの役人に隠れてゲルの中のストーブで焼く新しい習慣が形成された。現在でも、儀礼の簡便な方法として、多くの家庭でおこなわれている。これも、儀礼モジュールの「可塑性」を示すよい例であろう。

このような儀礼の身体性と政治性についての考察は、フィールドワークが可能となった現在、まずは儀礼と馬乳搾りのための労働力の動員、協働、財の分配といった現実の場面で詳しくなされる必要があるだろう。つまり、儀

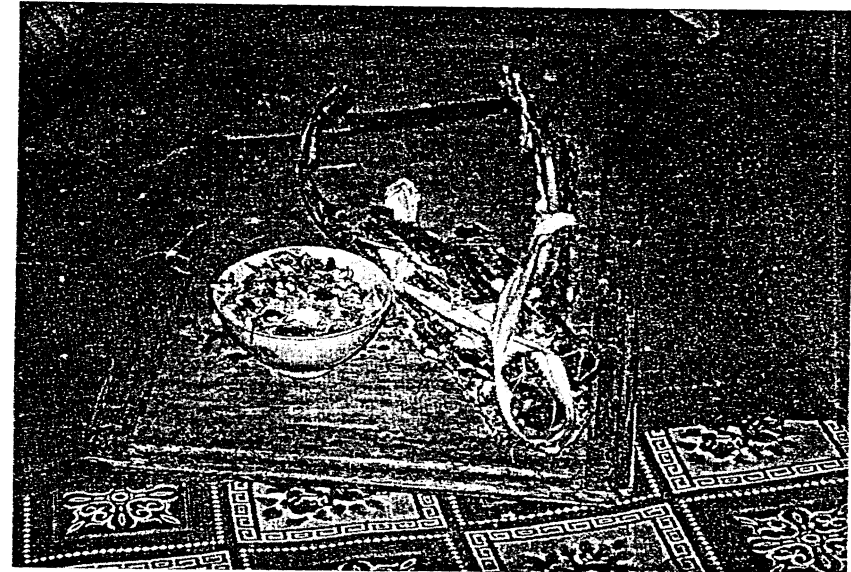


図4 チベット暦の元旦にアルタイ・オリアンハイが焼く羊の肋骨つき胸骨。残らず肉が焼ければ、その年は縁起がいいといわれる（1994年2月10日、ホブド県ドート・ソム）

第3部 動物をかたる

礼をおこなわせ、儀礼によって再構成される政治性の関係の網をたどってみることである。また、儀礼における象徴といったテーマよりも、儀礼を支える日常の動作といった身体技法の側面からの研究の重要性がもっと強調されてよいだろう。

【註】

- (1) ハンプリー、小長谷有紀（利光有紀）などの研究を参照のこと（Humphrey 1981, 利光 1989 b, 小長谷 1991 a, 1991 b）。
- (2) 調査報告書によれば、調査は同年5月9日から7月8日までのほぼ2ヵ月間の日程でおこなわれた。実質的な調査期間は5月11日から7月10日までで、ドンドゴビ県のロース、デルゲルハンガイの各ソム、ウヌムゴビ県のマンデル＝オボー、ボルガン、バヤンダライ、セルペー、ゴルバンテス、ノヨン、ツォグトツェツィー、ハンボグドの各ソム、ドルノゴビ県のハタンボラグ、アガロールト、フブスグル、ズーン・バヤン、サインシャンド、アルタンシレー、イヘヘトの各ソム、また報告書には洩れているが、同アイマクのオラーンボトラハ、マンダハ、ソリンヘルの各ソムを踏破し、英雄叙事詩、民話のほか、民謡、伝説、祝詞、なぞなど多くの口頭伝承を採集し、また仏教経典その他の文献を収集した。調査隊は、科学アカデミー言語文学研究所上級研究員Н. ロブサンバルダン（Х. Лувсанбалдан）を隊長に、同研究員Ch. ソドノム（Ч. Содном）、同Ts. ムンフー（Ц. Мөнхөө）、同J. ツォロー（Ж. Цолоо）、モンゴル国立大学4年生M. シネフー（М. Шинэхүү）、同大5年生D. サンザイジャムツ（Д. Санзайжамц）、同じくD. トウムルトゴー（Д. Төмөртогоо）が加わった。
- (3) 1961年以降の言語文学研究所の調査によるこの儀礼の記録には、以下のものがある。資料保存番号、採録年月日、表題、インフォーマントの名前、年齢、性別、職業、識字等の情報、所属ソム（カッコ内は過去の行政単位）を挙げる。
 - ①x 5 т 33 хн 1, 1974/6/25, Гүүний үрс гаргах ерөөл（牝馬のウルスを出す祝詞）
Балдангийн Банзрагч, 65 настай, эрэгтэй, малчин, улсын ерөөлч, хуучин монгол мэднэ. Төвд мэднэ. Өмнөговь, Цогтговоо, Замын Шанд бригад. Түшээт хан аймаг, Говь түшээг гүнгийн хушуу（Түшээт чин вангийн хошуу）
 - ②x 5 т 33 хн 47, 1974/6/20, Гүү барихын ерөөл（牝馬を捕らえる祝詞）
Самандарын Данда. Өмнөговь, Хүрмэн, Тулга бригад（Сайн ноён хан аймаг, Ёст бээсийн хошуу）
 - ③x 5 т 33 хн 57, 1974/6/7, Гүүний үрс гаргах тухай мэдээ（牝馬のウルス

馬の搾乳儀礼「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」再考

を出すことについての情報）

Халтарын Жүгдэр, 52 настай, эрэгтэй, Олгонууд овог, бичиг мэднэ. Дундговь, Хулд, Талын цэцэг нэгдэл, Бүлээн бригад（Түшээт хан аймаг, Түшээт чин вангийн хошуу）

*以下、全訳を示す。

とくに占わせた日時、1歳馬を捕まえる人間は、自分にとって縁起のよい方角（өөрийн сайн зүг）から1歳馬に近づき、馬捕り棒で捕らえる。このときその年最初に生まれた1歳馬から捕らえ、すべての1歳馬を捕らえてつなぎ終え、ゼルのかわりに白いフェルトの敷物を敷き、羊の肉を生きていたとおり（амьдын ёсоор, 全部）に置き、ほかの上物の食べ物、アルヒ、スーテイ・ツァイなど美味のものを並べる。／ウルス・ガルガハの祭詞（сан）を読むラマが一番上座に、つぎにその家の主人がすわり、ほかの客たちも順にすわる。／ラマでない2人の男（төрийн 2 хар хүн）が、初めて搾った乳を桶に入れて馬捕り棒でかつぎ、9つの穴のあるツァツアルで「ツェーン・ツォド」と叫びながらゼルの周りを巡り、撒く。つぎにヒーモリの祭詞を読む。／語彙の豊富で言葉巧みな人に、ハダグと碗に入れた乳を捧げて、牝馬を捕らえる祝詞を唱えてもらう。つぎにラマが経を読んで、一同上物の食べ物を手にもってホライを唱和する。そして手にもった食べ物を食べる。／つぎに肉を分けることに巧みな人間を選んで羊の肉（шүүс）を分ける。肉の半分は馬乳酒やアルヒ、乳製品をもってきた人の容れ物に入れてやる。残りをみんなで分けるのである。ラマと主人には多めにする。分けた残りの屑を部分をフェルトの敷物の上に置き、それを子供たちが奪い合う。／香を焚きながらゼルを回る。／今日ではこの儀礼は完全なたちではおこなわれなくなっている。／今日では肉をすべて煮て、ゲルの中かゼルのかわりで分けて食べる。この儀礼は、むかしも今も決まった少数の家でおこなわれ、どの家でもおこなわれるのではない。

- ④x 5 т 49 хн 3, 1982, Гүүний үрс гаргах ерөөл（牝馬のウルスを出す祝詞）
Гомбын Оргой, 47 настай, халх, шинэ бичиг мэднэ. Өмнөговь, Мандал-овоо. Говь түшээг гүнний хушуу（Түшээт хан аймаг, Түшээт чин вангийн хошуу）
- ⑤x 5 т 49 хн 8, 1982, Гүүний үрс гаргах ерөөл（牝馬のウルスを出す祝詞）
Хорлоогийн Сэрээ, 48 настай, халх, эрэгтэй. Өмнөговь, Баяндалай. Балдан засгийн хушуу（Сайн ноён хан аймаг, Ёст бээсийн хошуу）
- (4) これに関しては、近年、楊海英の一連の研究がある（楊 1995, 1996, 1998, 1999, 2000, 2001）。
- (5) たとえば、ブリアートの学者ガルダノフは、火の儀礼がチンギス祭祀と緊密な関係にあるとしているが（Галданова 1976: 152）、モンゴル国内においては社会主義

時代チンギスへの言及はタブー視されていたとされる。

- (6) Heissig (1966, 1968), 小長谷 (1991) など。とくに前者の研究は、発表年代からいってもモンゴルの研究者にも利用可能だったといえる。
- (7) 筆者は、モンゴルの伝統芸能面での国民—民族文化の創生について述べたことがある (上村 2001)。
- (8) この調査について、筆者はその概要と資料を提示したことがある (上村 1992)。本論には資料を再録する。
- (9) 「する」(хийх) は、「作る」「入れる」の意味ももつ。
- (10) 女性の姿をもつ無垢仏 (T. dri med) 「ヒルグイ・オヒン・テンゲル」(M. gkir ügei ökin tngri) と思われる。
- (11) 馬の搾乳開始の儀礼として b は欠けていてはならないが、「ウルス」とは c の羊肉そのもの、あるいは「ウルスをする」とは羊肉を参加者に分配することであると、A, G, H, I で解説されている。b のみでは「牝馬のウルスを出す」(гүүний үрс гаргах) という表現は用いられず、「牝馬を (1 年の最初に) 捕らえる」(гүү барих) の表現が用いられることがわかる。サンピルデンデブも、この区別にしたがっている (Сампилдэндэв 1987)。つまり、「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」とよばれうるのは、「b + c」と「a + b + c」だけである。もっとも、インタビュー J のインフォーマントは、「ウルスを出す」とは馬乳を撒くこと (ツァツアル) であるとしている。
- (12) 馬肉の食用がタブーとなったのは仏教が広まって以降とされる (後藤 1968: 69-72)。また、儀礼のために屠殺されるヒツジは、群の中でその年一番初めに生まれた子馬を捕らえた馬捕り棒で捕らえられるか、それと同時に屠殺される。この羊はその年一番初めに生まれた子馬やトボク・サイルの身代わりと考えられる。ただし子畜は食用されないで、子馬そのものが屠殺されていたとは考えにくい。
- (13) その家の炉 (火) の神に捧げると説明されることもある。

【参考文献】

〈邦文〉

上村明

1993 「モンゴル・ゴビ地方の馬の搾乳儀礼グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨスについて」『日本モンゴル学会紀要』23 (1992), 208-223

2001 「モンゴル西部の英雄叙事詩の語りと芸能政策」『口承文藝研究』24, 102-117

後藤富男

1968 『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館

利光 (小長谷) 有紀

1989 a 「ホルツバートル『哈騰根十三家神祭祀』」『史林』72-2, 139-149

1989 b 「モンゴル族、春の祭典——羊に託す願い」『季刊民族学』48, 36-46

小長谷有紀

1991 a 『モンゴルの春』河出書房新社

1991 b 「モンゴルにおけるウマ、ウシ、ヒツジの搾乳儀礼——祝詞にもとづく再構成の試み」『国立民族学博物館研究報告』16-3, 590-632

1996 『モンゴル草原の生活世界』朝日選書, 朝日新聞社

楊海英

1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10, 27-54

1996 「オールドス・モンゴルの祖先祭祀——末子トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連を中心に——」『国立民族学博物館研究報告』21-3, 635-708

1998 『《金書》研究への序説』国立民族学博物館調査報告 7

1999 「モンゴルにおける〈白いスウルデ〉の継承と祭祀」『国立民族学博物館研究報告別冊』20, 135-212

2000 「アルプス山とチンギス・ハーン——学術研究と文化復興運動の相互関連」『静岡大学人文論集』51, 27-77

2001 「モンゴルにおけるアラク・スウルデの祭祀について」『アジア・アフリカ言語文化研究』61, 71-113

〈欧文〉

Humphrey, Caroline

1981 "Text and Ritual for the Libation of Mare's Milk", *Journal of the Anglo-Mongolian Society*, 7:78-96.

Humphery, C. and Sneath, D.

1999 *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*, Duke University Press, Durham.

Mostaert, A.

1936 "L'《Ouverture du Sceau》et les Adresses chez les Ordos", *Monumenta Serica*, 1:315-337.

1950 "Sur Quelques Passages de l'Histoire secrète des Mongols", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 13:285-361.

1956 "Matériaux ethnographiques relatifs aux Mongols Ordos", *Central Asiatic Journal*, 2:241-94.

1962 "A propos d'une priere au feu", in Poppe, N. (ed.), *American Studies in Altaic linguistics*, pp.191-223, Bloomington, Indiana.

Poppe, N. N.

1925 "Zum Feurkultus bei den Mongolen", *Asia Major*, 2:130-145.

Rinchen, B.

第3部 動物をかたる

- 1959 *Materiaux pour l'étude du chamanisme mongol*, I, Asiatische Forschungen, Bd. 3. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Serruys, H.
1974 *Kumiss Ceremony and Horse Races-Three Mongolian Texts*, Asiatische Forschungen, Bd. 37. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- 〈蒙文 (モンゴル文字)〉
Damdinsürüng, Će.
1959 "Gegün-ü sün-ü saĉuli-yin sudur orosiba", *Mongvol uran Jokiyal-un degeji javun bilig orosibai, Corpus Scriptorum Mongolorum*, T.14, pp.96-100, Ulaanbavatur.
- Qurtabavatur, L.
1986 *Qatagin arban vurban atav-a tngri-yin tayilv-a*, 内蒙古文化出版社
- Sayinjarval & Šaraltai
1983 *Altan ordon-u tayilv-a*, 民族出版社
- Söngrüb & Seĉenbilig
1989 *Alšan-u ĵang avali*, 内蒙古人民出版社
- 〈蒙文 (キリル文字), 露文〉
Арьяасүрэн, Ч., Нямбуу, Х.
1991 "Гүү барих ёс", *Монгол ёс заншлын дунд тайлбар толь*, pp.66-69, УБ.
1992 "Гүү б а р и х ёс", *Монгол ёс заншлын их тайлбар толь*, Тэргүүн боть, pp.575-578, УБ.
- Бадамхатан, С. (ред.)
1987 *Халхын угсаатны зүй*, БНМАУ-ын угсаатны зүй, 1 боть, УБ.
Чингэл, Г.
1992 "Өмнөхүг", In Арьяасүрэн & Нямбуу 1992, pp.3-6.
- Дашням, Y.
1977 Б "Шаравын нэгэн зургийн тухай", *Studia Museologica*, 3:44-65, УБ.
- Гаадамба, Ш., Цэрэнсодном, Д.
1978 (1967) *Монгол ардын аман зохиолын дээж бичиг*, Нэмэн засварласан хоёр дахь хэвлэл, УБ.
- Галданова, Г. Р.
1976 "Кульť огня у монголов", *Исследования по истории и филологии центральной азии*, Труды Бурятского института общественных наука, выпуск 27, Серия востоковедная, Улан-Удэ.
- Нямбуу, Х.

- 1976 *Өнөөгийн монгол ёс*, УБ.
1984 *БНМАУ-д социалист ёс заншил төлөвшсөн нь*, УБ.
- Сампилдэндэв, Х.
1985 *Малчин ардын зан үйлийн уламжлал*, УБ.
1987 *Малчин ардын зан үйлийн аман зохиол*, УБ.
- Содном, Б.
1963 "Монголын ард түмний хамтран ажиллаж ирсэн түүхээс", *Хэл Зохиол*, 2-6:17-28, УБ.
- Содном, Ч.
1963 "1962 онд явсан ардын аман зохиол судлах шинжилгээний ажлын урьдчилсан дүнгээс", *Шинжлэх Ухааны Академийн Мэдээ*, 1963:3-70.
1965 "Гүүний үрс гаргах ёс (Этнографийн тэмдэглэл)", *Studia Ethnographica*, 2-15:29-40, УБ.
- Цэнд, Д.
1967 "Шинжилгээний анги орон нуагт ажилласан нь", *БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академийн Мэдээ*, 1967:4:94-95.
- Цэрэнсодном, Д.
1972 *Өв соёл (Ардын билиг, соёлыг сурвалжлан цуглуулагч нарт гарын авлага)*, УБ.
- Юндэмбазар, Г., Лувсанцэдэн, С.
1991 *Өмнөговь аймгийн хураангуй түүх*, I-Ц, Даланзадгад хот.
- Жамцарано, Ц.
1961 "Кульť чингис в Ордоце", *Central Asiatic Journal*, 6:194-234.

【資料】

(1)「牝馬のウルスを出す祝詞」

Зээ!	ぜー
Өдрийн сайныг өнжин хүлээж	よき日を久しく待ち
Сарын сайныг саатан хүлээж	よき月を永く待ち
Шар зурхайд нь шарлуулан үзэж	黄色い占いで占い
Бор зурхайд нь борлуулан үзэж	褐色の占いで占い
Өнөөдрийн өдрийг	きょうの日を
Өлзий дашваа бүрдсэн	吉兆そなわった
Өдөр өдрөөс сайн өдөр гэж	日々の中のよき日といい,
Наанаас нь харахад	こちらからみれば

第3部 動物をかたる

Нанжин хээтэй
Цаанаас нь харахад
Чамин хээтэй
Найман тахил бүрдсэн
Намгүр нэртэй хадаг барьж
Намайг ерөө гэсэн юм бизээ.
Хөх мөнгөн тэнгэрийн агаараас
Хөшиглөн цогцлож гардаг
Хөвөн цагаан үүлнээс
Хөллөн буусан
Хүйтэн хурын чийгээр
Хөрст алтан дэлийгээс
Ургаж дэлгэрсэн
Хөх ногооны шим бизээ.
Мал малын шим
Манай малын шим
Архи нэртэй аригуун чанартай
Сархад нэртэй сайхан чанартай идээг

Агар зандан хундганд
Ам дүүрэн мэлэлзүүлж
Эсрэн хурмастад
Тахил болгон өргөж
Энх олон бидэнд
Дээж болгон өгдөг идээ юм бизээ.
Өндөр сайхан дэнжид
Өргөөгөө барьж
Өнөр олон ах дүү нараа
Өнгө зүсээр нь суулгаж
Өргөн сайхан талд
Үй түмэн гүүгээ барьж
Зааны ширэн хөхүүр хийж
Зандан модон бүлүүр хийж
Урт сайхан зэлээ
Урдуураа татаж
Хол сайхан зэлээ

華麗な柄
向こうからみれば
精巧な柄
八供物そなわった
ナムグルという名のハダグを捧げ
私に祝詞を唱えよというのか。
蒼き銀の天より
幕のようにかたまり出る
白き綿雲より
脚を下ろし降る
冷たき雨の水気により
金の大地の土より
生え出で広がりし
青き草の養分であろう。
家畜たちの滋養
われらの家畜の滋養である
アルヒという名の清き性質の
サルハドという名のすばらしき性質の飲み物を
アガルという香木の杯に
なみなみと注ぎ
主なるホルマスタに
供物となして捧げ
平穏なるあまたのわれらに
上物となして与える飲み物であろう。
美しき高台に
宮殿を建て
あまたの兄弟を
似たものごとに座らせ
広き美しき平原に
無数の牝馬を捕らえ
象皮の酒袋を作り
香木のかき混ぜ棒を作り
長き美しきゼルを
前方に張り
遠長なる美しきゼルを

馬の搾乳儀礼「ゲーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」再考

Хойгуураа татаж
Харваж хүрэхгүй зэлтэй
Хатирч хүрэхгүй билчээртэй
Хөндийгөөр дүүрсэн
Хөх алаг адуугаа цуглуулж
Уургын уртыг барьж
Хуйвын цээлийг хийж
Хуй салхи шиг
Хурдан морио барьж
Хулан тахь шиг унагаа уургалж
Далан хүн дарж ногтлоод
Наян хүн найрлан чагтлаад
Начин заан цолтонгуудаар чангалуулж
Урт сайхан гадсаа
Уран зангилаат мунаар түгжиж
Уясан унага юм бизээ.
Зэллэсэн унага чинь
Зээр гөрөөснөөс олон
Ногтлосон унага чинь
Ногтруу шувуунаас олон
Айлаараа баян гэгдэж
Адуугаараа олон гэгдэж
Гучин хоног сарын хэмжээ
Гурван зуун жар хоног
Жилийн хэмжээ
Эргэх дөрвөн цаг
Ээлжлэх арван хоёр сар нь
Харшлах шалтгаангүй
Өдөр бүр цуглаж
Өглөө бүр найрлаж байхын
Өлзийтэй сайхан ерөөлийг
Нэгийн өмнөөс нийтийн дунд
Дээш дээш дэвшүүлэн айлтгаяа!
後方に張り
射たる矢の届かぬゼルをもち
馬を駆けて届かぬ牧地をもち
谷間に満ちた
青きまだらの馬群を集め
長き馬捕り棹を握り
広き輪を作り
つむじ風のごとき
速き馬を捕らえ
野生馬・野生ロバのごとき子馬を絡め捕り
70人で押さえて端綱をつけ
80人で協力して留め木にとめ
小結関脇たちが締め固め
長き美しき杭を
巧みに組んだ槌で打ち込み
つなぎとめた子馬であろう。
ゼルにつながれた子馬は
野生鹿の群より多く
端綱をつけられた子馬は
山鳥の群より多く
家族は富裕といわれ
馬群はあまたといわれ
30日のひと月のあいだ
360日の
年のあいだ
繰り返す4つの季
順に来る12の月
争う理由なく
毎日集まり
毎朝楽しむ
吉祥あるすばらしき祝詞を
代表してみなの中
高く高く捧げよう!

第3部 動物をかたる

(2) ウルスのことば

Гадгаад далайн усыг ууж
Гандин модны навчийг идэж явсан
Даргай эвэртэй
Далбан сүүлтэй
Халбан чихтэй
Халзан цагаан хонио
Энэ мянган хонины
Магнайд явдаг
Түмэн хонины
Түрүүнд явдаг энэ хонийг
Уран сайхан аргаараа
Урт сайхан цалмаараа
Цаламдан бариад
Мөнх төрийн хар хүнийг залж
Мөнгөн илмээр нь илдгүүлж
Алтан илмээр нь эвдүүлж
Ганжуу хотоос ирсэн
Ган ширмэн тогоонд
Хайч хусуур хүргэлгүй
Хайлгаж болгон чанасан
Алтан бүслүүртэй
Мөнгөн хадаастай
Агар зандан тэвшинд
Өрж тавьж
Өсгөж чимж
Эндэхийн хээлтэй бор гүүнээс
Алтан цээжтэй Мөнгөн бөгстэй
Унага гарсны тул
Үрсэнд зориулж гаргасан хонио

これは外海の水を飲み
ガンディンという木の葉を食べた
広がった角の
平たい尻尾の
大きな耳の
額にぶちのある白い羊を、
この千頭の羊の
先頭に行く
万頭の羊の
先を行くこの羊を、
たくみな技で
長き美しき投げ縄かけて
絡め捕り
永遠なる国の男を招き
銀の刃で皮をはぎ
金の刃で解体し
甘藷のまちから伝来の
鋼鉄の鋳物のなべで
鉄も甕も触れずに
融かして煮て
金のたがの付いた
銀のくぎを使った
アガルという香木の皿に
盛り付け
増やし飾り付け、
当地の妊娠した灰色の牝馬から
金の胸の、銀の尻の
子馬が生まれたので
ウルスのために殺した羊なり

(3) インタビュー (1992年9月の聞き取り調査)

A. GN (59歳、男性)

ウムヌゴビ県、ノムゴン・ソム、イヘ・ノムゴン山の北側に住む。1992年9月17日に聞く。

まず数日前か前日にウルスをする日を暦書によって決めて近所に触れる。寅か戌

馬の搾乳儀礼「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」再考

の日におこなう。子馬をつなぐ綱——ゼルを張る方向も暦書で決める。

当日の早朝、近所の男たちが馬捕り棹をもって集まってくると、彼らと馬捕り棹の両方を聖別（мялаах）する。2本の杭にみなでゼルを強く張る。ゼルと子馬の端綱とトグルをアルツ（杜松の葉）を焚いて清める。ハダグが結ばれた馬捕り棹でまずオーガン・オナガ（群の中でその年最初に生まれた子馬）を捕らえ、ゼルの上端（高い方）につなぐ。ほかの子馬もみな捕らえてゼルにつなぐ。

そしてオーガン・オナガを捕らえた人間が、その馬捕り棹でウルスのためのオスの羊を捕らえる。その肉は残らずゲルで煮られ、ボープ（菓子類）や乳製品などと一緒に、ゼルの上端に敷かれたフェルトの敷物の上に、ゼルに向けて作法どおり盛り付けられる。

ゼルにつないだ上端から3頭までの子馬の母馬から乳を搾り、ゼルの上端の横に置く。つぎに乳の入った桶を馬に乗った2人が馬捕り棹でかつぎ、そのあとをやはり馬に乗った人がしがたい、ツァツァルで乳を撒きながらゼルの周囲を3回回る。それから、オーガン・オナガとその父馬にハダグを結びつける。オーガン・オナガには馬捕り棹につけられていたハダグを額の両脇の毛に結びつける。これらはすべて男性がおこなう。

これが終わるとフェルトを敷いたところに一同集まり、ゼルの上端のかたわらに焚いておいた火に、盛り付けられた羊の肉の中から、脛骨（шаант）と長い肋骨4本（дөрвөн өндөр）の部分を骨だけになるまで焼く。これをウルス・ハイラハ（үрс хайлах、ウルスを融かす）という。

こうしてほかの部分でゼルのところでみんなに分けて、ゲルに入り夜どおし宴をする。肺、心臓、直腸、胃、首の部分は分けずにスープ（хоолоодтой шөл）にして、翌朝全員で食べる。

上記以外に、ゼルの2本の杭の外側にデルス（дэрс）をそれぞれ植える。これはデルスがよく根を張ることから、馬が殖えるようにという意味である。また羊の肉の上に馬捕り棹のかたち編んだデルスを置き、オーガン・オナガを捕らえたあと、それで子馬の耳をはさむ。

この儀礼は、雨が降り、草が生え、馬の数が殖えるようにと、ハンガイに馬乳の最上の物（сүүний дээж）と（馬群に対しても）羊肉を分け与えるのである。

2歳馬（даага）、3歳馬（шүдлэн байпас）から生まれた子馬は速いよい馬になると珍重され、トボク・サイル（товог сайр）とよばれるが、このあたりではトボク・サイルがいない家でも子馬が生まれた家では、この儀礼をおこなう。われわれの理解では、ウルス・ヒーフといえど何よりも羊の肉を思い浮かべ、羊の肉を分けて宴をおこなうと理解する。特別な理由でウルスを出せない家は、乳も撒かず、子馬をゼルにつないだあと、食事をして解散する。

その年の搾乳を終える（гүү тавих）ときには最後の乳を搾って、「元気でいろ」

第3部 動物をかたる

と去っていく子馬のうしろから撒いてやる。宴会はおこなわない。

それ以前、子馬にタムガ（焼き印）を押したときには宴が催されるが、羊肉は出ない。

B. TsTs (91歳, 男性)

ウムヌゴビ県、ノムゴン・ソム、ソムの中心に住む。13歳から38歳までサンギーン・ダライ寺のラマであった。1992年9月18日に、以前どのようにおこなわれていたかを聞く。この家族は種馬2頭を含む20数頭の馬をもつ。これらの儀礼からは仏教的要素は排除されているが、今年もおこなわれたという。

搾乳を開始する(гүү барих)のは、寅、戌、午のいずれかの日である。おもに戌の日に開始する。夏の終わりの月(太陽暦7月)か秋の初めの月にする。夏中にすることができたらよい。

ゲルで煮た羊1頭の肉を、首と胃の部分だけを残し、ゼルの上端のかたわらに敷いたフェルトの敷物の上に、菓子(ボーブ)や乳製品とともに並べる。そして脛骨と4本の長い肋骨の部分にアリヤー・エレンマンダという名の仏をのせる。ゼルの上端から3頭分の乳を撒いたのち、羊の肉をやってきたすべての人間に分ける。そのとき、脛骨と長い肋骨4本の部分をゼルの上端近くに焚いた火にくべる。こうして火を通じて馬の神(адууны тэнгэр)であるアリヤー・エレンマンダに捧げるのである。

このとき乳を撒くときには、「ゴドマ・バラージャド」(筆者注——< Tib. rgod ma 'bras byed), モンゴル語にすると“Гүүний үр тахил”という経を読む。このүрとは子馬のことであり、「牝馬の子を出す」経といってもいい。ここのサンギーン・ダライやノムゴン山や北京までさまざまな地名が出て来る。夏、雨が降るように、馬の数が増えるようにと祈る経である。

馬乳酒ができてからする家もある。滋養の象徴(шинийн бэлэгдэл)であるアルヒを作って用意する家もある。つないだオーガン・オナガの背(шил нуруу)にアルヒをかけるのである。

ゼルのところで肉を分け、そこでそれを食べ終わると、ゲルに入って夜どおし宴をひらき、翌朝、「胃のスープ」(ходооны шөл)を食べる。

ゼルの上端に馬取り棒のかたちに編んだデルスを用意するのは、むかしチンギス・ハーンがホルマスタから白い牝馬をもらい、この牝馬から生まれた子馬をチンギス・ハーンがデルスでつないだので、この習慣が始まったのである。

1年の搾乳を開始するとき、もし時間があつたら子馬にタムガも押してしまう。しかし、一般には一年の搾乳を終了するときタムガを押す。巳の日に搾乳を終了するようになったのは最近のことで、ジェブツンタンバ8世が巳年生まれだったからである。このとき、「サンジッド・ダンセレン」(筆者注——< Tib. bsang spyod drang srong)という経を読む。そして乳を撒き、子馬の端綱をしまう。

馬の搾乳儀礼「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」再考

C. DN (56歳, 男性)

ウムヌゴビ県、ハンボグド・ソム、バヤンオボーとハンボグド両ソム境に住む。1992年9月19日に聞く。この家ではつい最近ウルスの儀礼をしたということで、脛骨と長い肋骨4本の部分の肉がくべられたという火を焚いた跡が残っていた。

今年は9月7日(戌)に、馬の搾乳を開始した。ふつうは7月か8月の戌の日である。搾乳終了は寅の日、タムガを押すのと同じ日にする。

ゼルの両端の外側にはデルスが植えつけられる。

オーガン・オナガをまず捕らえてゼルの上端につなぎ、残りの子馬も捕らえてゼルにつなぐ。ゼルの上端から3頭の子馬の母馬の乳(эхний гурван саам)を搾る。これは男性がおこなう。

そしてオーガン・オナガとその父馬にハダグを結びつける。そのとき、デルスを馬取り棒のかたちに編んでオーガン・オナガの耳をはさみ、轡に通す。このデルスはあとでヤマー・トーハイ・ザンギ(ямаа туухай занги)というかたちに編んだデルスと一緒にダルハン・ホル(дархан хул. 人が手をつけてはならない、乳を入れた木の椀)の上に置かれる。

搾った乳の入った桶の取っ手に馬取り棒が通され、子馬を捕らえに集まった男たちがみんなでかついで徒歩でゼルの周りを3周する。それに後から1人がしがたい「ツォーン・ツォド」(Цоон цод)と言い、乳を撒く。

それからゼルの上端のデルスと食べ物の置かれたフェルトの敷物とのあいだに焚かれた火に、脛骨と長い肋骨4本の部分がくべられる。こうして馬群に捧げるのである。これを「ウルス・ハイラハ」という。

そして、フェルトの上で羊の肉を分けて食べて、ゲルに入って夜どおし宴会をする。翌朝みんなで「胃のスープ」を食べて散会する。

ほかの家畜では、最初に乳を搾るとき乳を撒く儀礼はない。

D. J G (56歳, 男性)

ウムヌゴビ県、ハンボグド・ソム、ツァガーントルゴイト寺跡に住む。フルムン・ソムの出身で、ダランザドガドで運転手をしてしたが、退職して2年前に移ってきた。今は馬はいない。1992年9月20日に聞く。

目上の人(ахмад хүн)に頼み、ハダグを結んだ馬捕り棒でまずオーガン・オナガを捕らえてもらう。ゼルの周りで乳を撒いたのち、ゲルに入り、羊の肉で宴をする。

E. 不明

ウムヌゴビ県、バヤンダライ・ソム、バヤンダライから東へ17キロ地点に住む。バヤンダライの中心から去年こちらに移ってきた。5つのゲルで構成されるアイル。1992年9月17日に聞く。

今年は8月14日(18日?)戌の日、馬の搾乳を開始した。3歳馬が出産したの

第3部 動物をかたる

とは関係なく、かならず羊の肉で祝う。タムガを押したときにも宴を開く。種馬2頭、牝馬数頭を含む、30頭あまりの馬がいる。

F. DE (25歳, 男性)

ドンドゴビ県, ウルズイート・ソムに住む。デルト・ブリガード, バローンボラク。

1992年9月21日に聞く。

今年は7月18日(16日巳?)に馬の搾乳を開始した。戌か巳の日に開始するのがいいである。タムガを押すのは戌か巳の日で、その日に搾乳も終了する。オーガン・オナガの額に、捕らえた馬捕り棒に結んであったハダグを結ぶ。ゼルの上端から3頭分の乳を、男たちが徒歩でゼルの馬の群の外側を「ツォーン・ツォド」と叫びながら、撒いて回る。ゼルのところで羊の肉を分けて食べたのち、残った肉をテーブルごと「さあ、運んできたぞ、運ぶぞ」(Заа нүүлээ, ачлаа)と掛け声をかけながら途中3回休んでゲルに運び込む。

翌朝「胃のスープ」を食べる。この中には血詰めの胃、首、胸骨の部分(овчүү), 直腸、頭、すね(шийр, шаантの下に続く部分)が入っている。脛骨と長い肋骨4本の部分を火にくべることはしない。ユルールはゲルで宴会のときに唱える。

タバク・サイル(таваг сайр)は牡だけをいう。牝のほうの名前は忘れてしまった。搾乳を終了するときは指遊びをしたりして夜どおし宴会をする。そのとき「タムガの5杯」(тамганы тав)といい、馬乳酒を木の器(хул)5杯ずつ飲む。

2頭の種馬, 牝馬20頭, 子馬5頭を含む25頭の馬がいる。そのほか羊が約200頭。

G. DJ (71歳, 男性)

ドンドゴビ県, ウルズイート・ソムに住む。デルト・ブリガード。1992年9月21日に聞く。

今年は8月6日の戌の日(筆者注——実際は寅の日)に搾乳を開始した。例年寅か戌の日におこなう。戌の日に搾乳開始して、寅の日にタムガを押すならいである。

オーガン・オナガはその家の主人かその子(үр хүүхэд)が捕らえる。

2人の男が乳を入れた桶を馬捕り棒でかつぎ、1人があとからしがいい乳を撒く。そのとき「ツォーン・ツォド」と叫ぶ。これは男性だけでおこなう。そうして馬取り棒をゼルのところに立てかけ、サンを読む。

そしてゼルの上端で羊の脛骨と長い肋骨4本の部分を焼く。このとき「13サン」(Арван гурван сан)を読むこともある。

つぎに、肉の残りの部分をみんなに分けて飲み食いしたあと、子供が残りくずを奪い合う。そして食べ物が並べられていたテーブルをゲルに運び込む。ゲルでは大きな宴会はしない。

馬の搾乳儀礼「グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス」再考

ウルス・ヒーフとは羊の肉を分けることと理解している。そうすることで害から家を守るのである。

タバク・サイルの生まれた家では、必ずウルス・ヒーフする。牡は速い馬になるが、牝のタバク・サイルも速いよい馬を生む。

この儀礼の意味は、大地の主(лус газар)を喜ばせ、雨を降らせ、家畜が増えることを祈ることにある。

H. 不明(36歳, 男性)

ドンドゴビ県, デルゲルツォグト・ソムに住む。2年前までマンダルゴビでトラクターの運転手をしていた。1992年9月12日に聞く。

馬の搾乳開始は、おもにナーダムの前、7月8月の寅の日におこなう。寅の日に開始し、戌の日に子馬にタムガを押し、巳の日に搾乳を終了する。

縁起のよい方角を選んでゼルの杭を打ち、子馬を捕らえるのに集まった男たちがみんなでゼルを強く張る。

ハダグが結ばれた馬捕り棒でオーガン・オナガが捕らえられると、馬捕り棒からオーガン・オナガの額にハダグが結び移される。

ゼルの近くには白いフェルトが敷かれ、乳製品が並べられている。

乳を撒くとき、以前は9頭の白馬に乗った人たちがゼルを3周し、「ツォーン・ツォド」と言っていた。今はこのように馬を集めるのがむずかしい。

ゼルの近くのフェルトのところで乳製品を分けて飲み食いする。馬乳酒もまだできていないから歌が歌われるような宴会にはならない。タムガを押すとき、搾乳を終えるときには、仕事の成果が出ているから宴会をする。

しかし3歳馬が子馬を生んだ場合には、羊の肉を出して、やってきたすべての人間に分けて祝う。分け与えられた肉はその場で食べてもいいし、家にもちかえて食べてもいい。自分はこの羊の肉をウルスと理解している。ウルスを出すといえば羊の肉が出される、単にグー・バリフ(гүү барих)といえは乳製品や菓子だけで祝うと理解する。ウルスは毎年続けて出さなければいけない。

集まってきた人たちは、家の主人に「子馬はおとなしいですか」(Унага номхон байна уу?)と聞く。それに対して主人は「おとなしいですよ」(Номхон байна)と答える。

搾乳を終了するときには最後の乳を撒き、ゼルの杭を抜いた穴に米か大麦を入れる。そしてゼルを蛇がとぐろを巻くようにする。これは蛇が流産することがないのにあやかるためである。

I. EO (51歳, 男性)

ドンドゴビ県, デルゲルツォグト・ソムに住む。1992年9月22日に聞く。

オーガン・オナガを捕らえるときハダグを馬捕り棒につけ、捕らえたのち子馬の額のところに結びつける。

3頭分の乳の入った桶は、その家の主人と女主人がもち、「ツォーン・ツォド」と言いながら撒く。

用意するのは乳製品だけで、宴会はおこなわれない。宴会がおこなわれるのは、子馬にタムガを押し、1年の搾乳を終える日である。あるいは、馬乳酒ができてからだと宴会が催される。

タバク・サイルが生まれた家では、かならず羊の肉を出して客にふるまう。これをウルス・ヒーフという。そしてそれを続けておこなわないと縁起が悪い。

以前は、ウルスをするときには、ゼルの上端の西側に火を焚き、上端のところに置いた羊の肩胛骨(дал), 頭の部分(толгой), 下端に置いた胸骨, 脛骨と長い肋骨4本の部分を骨だけになるまで焼いていた。これはその家の主人がおこなう。そこで肉を分けて飲み食いし、翌朝「胃のスープ」を食べる。

J. TsT (73歳)

ドンドゴビ県, アダーツァグ・ソムに住む。1992年9月13日に聞く。

まず、1人がその家の主人にとって縁起のいい方向(гэрийн эзний хий морьны зүг)から馬群に駆けていき、ハダグをつけた馬捕り棒でオーガン・オナガを捕らえる。ハダグがないときは赤い糸でもよい。捕らえたあと、それをオーガン・オナガの額につける。これは夕方子馬を放すときに取る。

そしてゼルを3回回り、10の方向に乳を撒く。乳がよく出て、馬群が増えるようになると、ハンガイ(алтан дэлхий хангай)とハン・ホルマスタ神、つまり「母なる大地、父なる天」(эх газар, эцэг тэнгэр)に対して、また国家や仏教に対して祈るのである。これを「ウルス・ガルガハ」という。

非常に稀に3歳馬以下の若い牝馬が子馬を生む場合がある。そのときには、これに付け加わる儀礼がある。まず、この子馬のためにとくにゼルを一本張り、そこにつないで「トボク・サイル」という称号(цол)を与える。やってきた人々がお金を捧げたりしてその子馬を聖別(мялаах)する。主人は乳やアルヒで聖別してやる。トボク・サイルの「サイル」とはサイン・エル(сайн эр)のことである。

ゼルのかたわらのフェルトの上には乳製品などのほか羊1頭を煮た肉が盛り付けられ、やってきた人たちにふるまわれる。これは最低9年間毎年欠かさずおこなわれなければならない。自分のところでもトボク・サイルが生まれ、毎年この儀礼をおこなっている。

子馬にタムガを押すときにも家畜が増えることを祈って宴会がおこなわれる。搾乳を終了するときには宴会はない。端綱の宴(ногтын найр)をするところもあるが、自分は搾乳が終わってしまうのに宴会をするのはつまらないと考える。

巳の日に搾乳を終了するのは蛇が流産しないからである。

ほかの家畜では初めて搾った乳を撒くということはない。

全部で馬は約80頭、4頭の種馬がいる。

K. OG (37歳, 男性)

トゥブ県, バヤンウンジュール・ソムに住む。バヤンバラート・ブリガード。1992年9月24日に聞く。

6月15日(戌)に搾乳を開始。タムガを押して子馬を放し、搾乳を終了するのは、今度の寅の日を予定している。これは巳の日でもよい。

馬捕り棒にハダグを結び、オーガン・オナガを捕らえて、そのハダグを結ぶ。

撒く乳は1頭分でも3頭分でもよい。男主人が桶をもち、女主人が乳を撒く。撒きながら「ツォーン・ツォド」と言う。アルツでゼルを淨め、ゼルの上端にビヤスラグなどを並べ、それを食べて終わる。

タバク・サイルの生まれた家では、ゼルの中で羊肉を食べて祝う。火にその部分を焼くことはない。それもその年限りで続けてはおこなわない。「胃のスープ」も作らない。

乳を撒く目的は、乳をハンガイに捧げ、すべての家畜を聖別することである。

搾乳を終了するときには、ゼルの杭を抜いた穴に米を入れ、翌年も米のように子馬が生まれることを祈念する。

3頭の種馬、10頭の牝馬(гүү)を含む約20頭の馬をもつ。